

# 園生活での音楽表現活動の重要性とその活動を 支える保育者に求められる技術に関する一考察

諸井サチヨ

(2019年9月10日受理)

## 要 旨

今回の調査では、自身が園生活で経験した音楽表現活動について肯定的な感じ方が多いということが分かった。現在も園生活においては、朝の会、昼食時、帰りの会での歌唱は多く実施されており、園生活での歌唱活動やその他の音楽表現活動についての経験は大変重要である。これら、音楽との関わりは、成長してからもほとんどの場合、“楽しかった”という肯定的な記憶が残っていることもアンケート結果から明らかとなり、園生活での音楽表現活動がその後の生活や成長につながっていることも明らかとなった。

幼児期における歌唱やその他の音楽表現活動は、園での活動であっても、園以外の活動であっても、その後の成長に影響を与えていると考えられ、ないがしろにはできない活動であるということがわかった。しかしながら、実習や実際の保育現場での音楽表現活動を問題なく進めるためには、保育を学ぶ学生にとって、ピアノの演奏技術の習得という不安があることも再確認された。学びの途中である実習では、ピアノの演奏技術ばかりに気を取られ、子ども主体であるべき活動がスムーズに実施でなくなる可能性も示唆された。ピアノの演奏技術も当然のことながら重要であるが、ピアノだけにとらわれず、活動を進めていく上で柔軟に対応できる力が保育者に必要とされることが示唆された。

キーワード 園生活、表現、歌唱、子ども主体

## I. はじめに

園生活での音楽表現活動や幼児期<sup>1</sup>の音楽との関わりがその後の成長にどのように影響を与えているのか。なぜ園生活では歌を歌ったり、楽器演奏をおこなったりするのか。

園生活を考えた時、朝の会・昼食時・帰りの会での歌唱、鍵盤ハーモニカ等の楽器練習、鼓笛隊、カスタネット等簡単なリズム楽器を使用した合奏、リトミック等、音楽に関する活動が様々あるが、特に日々の生活の中での歌唱活動は多くの園で取り入れられている。朝の歌、おべんとうの歌、帰りの歌、季節の歌、行事に関する歌等、曲数も相当多く扱っている。

1

これら幼児期の音楽表現活動がどの程度その後の成長に影響しているのか。学生自身の幼児期の経験を振り返った時、それらの活動が肯定的な印象や影響を与えていたのか。そしてその活動が今現在の自身にどのようにつながっているのか。その結果、幼児期に触れる音楽表現活動は感性を育てるために必要であったと言えるのだろうかということを考えてみたいと思う。そして、その重要な音楽表現活動を実施するために、保育者はどのような環境を提供しなくてはならないのか、どのような配慮や援助をしていくべきなのかということも考えてみたい。

今回のアンケートでは学生の幼児期の音楽との関わりを調査し、幼児期における音楽活動はどうであったか、将来、子どもたちと音楽表現活動を共にするためには保育者にはどのような技術・能力が必要なのかということについて考えたい。さらには、養成校で学生達の指導において、ピアノ指導以外に留意する点についても考えていきたい。

## II. 先行研究の検討

将来保育者を希望する学生のほとんどがピアノ初心者であるため、養成校における指導ではピアノに特化したものがほとんどである。ピアノ指導が優先されている。そのため、養成校での音楽科目に関する研究や指導法の研究もピアノ指導に着目したものが多く<sup>2</sup>。実際の保育現場で表現活動を行なう際の子どもたちの様子や保育者の配慮を考えた時に、ピアノの技術ばかりが重要視されている現状に問題はないのだろうかという疑問が生じる。ピアノの演奏技術以外にどのような能力や技術が必要で、それらを習得した上で子どもたちと音楽表現活動を行なう場合にどのような援助が適切であるのかということについての研究は十分であるとは言えない。

園活動の日常においては、現在、歌唱活動が音楽表現活動のほとんどであり、山下・虫明の両氏が「幼児が生活を楽しみながら成長していくうえで、歌の活動が幼児の成長に与える影響は計り知れない」<sup>1)</sup>と述べているように、音楽表現活動は非常に重要であるため、その際の援助や配慮に関しては慎重に扱われなければならない。

ピアノの演奏技術に関する研究だけでなく、現在、養成校で学んでいる学生自身が幼児期に音楽と関わる中で、音楽に対してどのような思いを持っていたのか、そのような日常、園生活での経験が今現在、どのように成長に影響を与えていると自覚しているのかという背景を考えることが必要であり、それを踏まえた上で実際に必要とされる保育者側の技術や能力についての研究が必要とされる。

2

### III-1. 調査対象・方法

【方 法】 無記名式アンケート（選択質問と自由記述）

【対 象】 S 大学短期大学部こども学科

1 年生 135名（回収率 99% 134名）

2 年生 19名（回収率 79% 15名）

【調査時期】

1年生：入学してから3ヶ月半程度たった頃

2年生：教育実習Ⅱ終了後

問(1)から問(6)までは1年生を対象に、問(7)から問(12)までは2年生を対象に実施した。

※ アンケート結果については公表する旨、同意を得ている。

### Ⅲ-2. 学生の履修状況と内容

S大学短期大学部では、音楽科目として1年次に「音楽と表現」、2年次に「音楽Ⅱ」の授業が開講されている。1年次は、主に歌唱技術と音楽の基礎知識を学ぶ時間と幼児歌曲の弾き歌いの演奏技術を学ぶための時間が設けられている。歌唱を中心とした授業とピアノの弾き歌いを学ぶ授業がそれぞれ週に1コマずつ設けられ、学生は週に2時間、音楽関連の科目を履修している状況である。ピアノの弾き歌いでは入学当初よりバイエル等の教則本は使用せず、幼児歌曲のみを練習している。伴奏型に関しては、最終的には実際の保育現場で役立つような弾き歌いの型で弾けることを目標としているが、それぞれのレベルに合わせて担当教員が伴奏型を考慮し、簡易伴奏のものを用いたり、アレンジを加えたりしながら、歌もしっかり歌えるようにしている。ピアノ経験者に関しては、なるべく原曲の伴奏型で弾けるよう指導をし、その楽曲の雰囲気や情景が表現できるようにしている。「音楽Ⅱ」では、1年次に習得した内容をさらに深め、発展させるための内容となっており、弾き歌い中心のピアノレッスンのみとなっている。「音楽Ⅱ」は選択科目となっており、2年次の前期には教育実習Ⅱが控えているため、授業内では主に実習で課題に出ている幼児歌曲等のレッスンを実施している。2年次のピアノに関しては、選択となるため、履修者が1年次の $\frac{1}{5}$ 程度となっている現状がある。

### Ⅲ-3. 調査目的

自身の幼児期を思い出し、音楽との関わりや、園生活での音楽表現活動を振り返ることで、幼児期における音楽との関わり的重要性や音楽が与える影響について学生自身に考えてもらうためである。また、園での実際の音楽表現活動を見学観察した時の子どもたちの様子や配慮を振り返り、考えてみることで、幼児期の音楽表現活動の必要性やそれらが現在にどのようなにつながっているのかを考え、表現活動に対する理解を深め、今後の学びに役立たせるためでもある。実習やボランティア等で実際の園生活に関わったり、実習時に部分実習や責任実習を実施したりする際にどのようなことに不安を感じているのかについて再認識することにもつながる。自分自身の経験や実習での経験を踏まえた上で、現在の自分自身に必要な技術や、将来保育者になり、子どもたちと音楽表現活動をおこなうにあたり、身につけておくべきと考える技術や能力について理解を深めるためである。

### Ⅲ-4. 調査内容

- (1) 音楽は好きか。幼児期に音楽に触れていたか。
- (2) 音楽とどのような関わりを持っていたか。
- (3) あなたにとって音楽はどのようなものか。
- (4) あなた自身の経験で、園での音楽表現活動をどのように感じていたか。
- (5) 幼児期に音楽に触れたことは、その後の成長に影響を与えていると思うか。
- (6) 問(5)で「はい」と回答した場合、どのように影響を与えているか。
- (7) 責任実習でどのような音楽表現活動を実施したか。
- (8) あなた自身、責任実習で音楽表現活動を実施した際、どのようなことに配慮したか。
- (9) 音楽表現活動を行っている時の子どもたちの様子について、気づいたことは何か。
- (10) 責任実習を経験し、音楽表現活動を行なう場合、具体的に活動を援助・支援する側にはどのような能力が求められていると思うか。
- (11) 幼児期に音楽表現活動が重要だと思う理由について。
- (12) 園での音楽表現活動を通して、子どもたちにどのように感じてもらいたいのか。

### Ⅳ. 調査結果

(1) 音楽が好きかという問いには、133人が「はい」と答えた。「いいえ」と答えた学生もあり、理由としては幼児期に自分で弾いてみたいと思った曲がなかなかうまく出来なかったからというものだった。幼児期に音楽に触れていたかという問いでは、118人が「はい」と答え、16人が「いいえ」と答えた。

(2) 具体的に音楽とどのような関わりを持っていたかという問いについては「楽器を習っていた」という回答が一番多く、その中でもピアノを習っていたと回答した学生が56名と多かった。

その他の回答については、「楽器を習っていた」、「歌を歌っていた」、「音楽に合わせて踊っていた」、「バレエを習っていた」、「リトミックをやっていた」、「合唱をやっていた」という回答があった。音楽との関わり方については、習い事として関わっている場合もあれば、習い事までではないが、日常生活の中で自然と音楽に触れている場合もあった。

4

(3) あなたにとって音楽はどのようなものかという問いについては図表①のような回答が得られた。

(4) 園での音楽表現活動をどのように感じていたかについては図表②のような回答が得られた。

(5) 幼児期に音楽に触れたことは、その後の成長に影響を与えていると思うかという問いについては、「はい」と答えたのが104名、「いいえ」と答えたのが29名であった。

(6) 問(5)で「はい」と回答した場合、どのように影響を与えているかとの問いについては図表③のような回答が得られた。

図表①

・毎日聴くもの
・とても身近なもの
・その日の気分に合わせて音楽を聴くことで、気持ちがポジティブになるもの
・聴くと心が落ち着くもの
・気持ちを整えてくれるもの
・表現手段の一つ
・生活の一部
・体の一部
・元気を得ることができるもの
・歌ってストレス発散できるもの
・得意なもの
・大切なもの
・音楽を通して出逢った人がいるので、音楽は特別な存在
・楽しさを他人に伝えたいと思うもの
・歌うことは得意でないので、自分からは歌いたいとは思わない
・好きな音楽を聴けば幸せだと感じる
・皆で一つになれて笑顔になれるもの
・過去を思い出せるもの
・なくてはならないもの
・音を楽しむこと
・心に寄り添ってくれるもの
・毎日の楽しみ
・新しい自分を見つける手段
・自然にあるもの
・心の支え、癒し
・周りの人とのコミュニケーションの手段
・嫌なことがあってもわすれさせてくれる存在
・音楽を通して友達の仲が深まり、一緒に歌うことで楽しさが倍増するもの
・会話とは別の方法で、他の人と関わることができるもの
・普段の生活で身につかないことが音楽を通して身につけられる (リズム感や表現力)
・保育士になるために必要なもの

(7) 責任実習でどのような音楽表現活動を実施したか。責任実習を実施した学生15名に対して調査を実施した結果は図表④の通りである。

図表②

・楽しかった
・恥ずかしかった
・先生が弾くピアノが好きだった
・覚えていない
・楽器の練習が大変だった
・ずっと正座で辛かった（琴の練習）
・歌いたくなかった
・感動した
・色々な楽器や音楽の文化にふれられてよかった
・わくわくした
・うまくできなくて苦労した
・あまり得意ではなかった
・楽器の演奏は間違えたら怒られて楽しくなかった
・もっとやりたいと思った
・心が落ち着く大好きな時間だった

図表③

・今では音楽が好き
・歌うことが好きになっている
・表現力がついた
・吹奏楽につながっている
・リズム感がついた
・音楽に合わせて体を動かすことが楽しいと思えるようになった
・人前に出ることが苦じゃなくなった
・歌を聴くと楽しく感じる
・その後の部活に関係している
・音楽に関わろうとしている
・現在、役に立っている
・楽しめるようになった
・音感がついた
・幼い頃に歌った歌を今でも覚えている
・音楽が好きになったり、嫌いになったりした
・感情が豊かになった
・鍵盤の位置がわかるようになった
・音楽に興味を持つようになった
・様々なジャンルの音楽を聴くようになった

(8) あなた自身、責任実習で音楽表現活動を実施した際、どのようなことに配慮したかという問いについては図表⑤のような回答が得られた。

(9) 音楽表現活動を行っている時の子どもたちの様子について気づいたことは何かという問いには図表⑥のような回答が得られた。

図表④

・主活動で「かえるのうた」を使用し、ピアノで弾き歌いをした
・活動の前に全員で歌った
・朝の会、昼食時、帰りの会での歌唱活動で弾き歌いをした

図表⑤

・間違い易い歌詞は先に伝えるようにした
・叫ばない程度に元気に歌うように声かけをした
・自分自身もしっかり歌った
・ピアノを弾いていても子どもたちの様子を見るようにした
・伴奏はとまらないようにした
・楽しく歌ってもらえるように曲選びを工夫した
・歌う前にその歌についての導入をおこなった
・わかりやすいようにリズムを手拍子でとってみた
・伴奏の速さに気を付けた
・歌い易いように合図を出した
・飽きずに楽しく出来るようにテンポを変えて弾いた

図表⑥

・元気な声で歌っている姿が見られた
・全員が歌詞やメロディーを必死に覚えようと頑張っていた
・表情が豊かだった
・「歌う」というよりはただ大きな声を出しているといった感じがした
・踊ったり、手を動かしたりしながら、楽しく歌っていた
・保育者に褒められると大きな声で歌うようにしていた
・楽しそうにしていた
・テンポが速くなってずれて歌う様子が見られた
・一生懸命取り組む子どもが多かった
・鍵盤ハーモニカの練習時は得意な子はどんどん先に進もうとする様子が見られた
・飽きてしまう子がいた
・楽しむというより、しっかりやろうとしている様子が見られた
・合奏の練習時はリズムを合わせようと頑張っていた



(10) 責任実習を経験し、音楽表現活動を行う場合、具体的に活動を援助・支援する側にはどのような能力が求められていると思うかという問いについては図表⑦のような回答があった。

(11) 実習を経験して、幼児期の音楽表現活動は重要だと思うと15人全員が答えており、幼児期に音楽表現活動が重要だと思う理由については図表⑧の通りである。

図表⑦

・声の大きさ
・ピアノの演奏技術
・臨機応変に対応する力
・伴奏が止まってしまった時に立て直す力
・本番に緊張せずに弾き続ける精神力
・声掛けのバリエーション
・子どもたちを見ながら弾き歌いできる技術
・子どもを観察する力
・歌唱力
・伴奏しながら歌詞を伝える能力

図表⑧

・楽しむ手段が増えるから
・音楽の楽しさ、面白さを味わうことができるから
・表現力がつくから
・音楽に触れることで、豊かな感性が育まれると思うから
・表現する楽しさは自信につながると思うから
・精神的な面でも成長出来ると思うから
・体も使って楽しめるから
・経験の幅が広がるから

図表⑨

・音楽の面白さを知って欲しい
・目標に向かって頑張ったり、努力したり、達成感を味わったりして欲しい
・心が豊かになって欲しい
・音楽を楽しみたいと感じてほしい
・音楽を通して自分を表現することの楽しさを感じて欲しい
・自分の周りの音に興味を持って欲しい
・皆で一つの音楽を作り出すことが楽しいことを感じてもらいたい
・季節などを想像しながら、歌詞にこめられた気持ちを大事にして欲しい
・自分の表現に自信を持って欲しい
・自分を表現するツールになることを知って欲しい
・仲間と一緒に演奏する楽しさを感じてもらいたい



(12) 園での音楽表現活動を通して、子どもたちにどのように感じてもらいたいかとの問いについては図表⑨のような回答があった。

## V. 考察

ほぼ100%の学生が「音楽」は好きだと回答している。幼児期からの音楽との関わりが影響し、そのような回答に至ったと考えられる。音楽に関して辛い思い出ばかりでは、このような結果は得られなかっただろう。幼児期に習い事をしたり、園活動において音楽表現活動を経験したりすることで、音楽に親しみがわいてくる。人間にとって音楽は身近に感じられるもので、様々な場で関わるができるものでもある。調査結果からも分かるように、音楽は学生達にとって、精神的なよりどころとなっているし、人とのつながりを得られるものでさえもある。

音楽の存在は重要なもので、人にとって精神的な支えになっている場合が多く、悲しい時、落ち込んでいる時に音楽を聴くと励まされ、癒され、元気づけられると回答したものが多かった。

自分から歌を歌ったり、音楽を聴いたりする行為で、抱えているストレスを発散している場合もある。

興味深い結果としては、音楽で人とコミュニケーションをとっているということである。自身と音楽という一つの関係性だけでなく、集団での活動や関わりを通して、さらには同じ目的を持って取り組む事で気持ちを一つにすることができる。そしてその結果、笑顔になることができるという回答もあることから、自身と音楽との間に他人の関わりが追加されることで新たな関係性が生じ、自身と音楽だけの関係性の時とは違った効果があるということが言える。音楽はただ単に技術を習得したり、訓練したりという個だけの作業ではなく、集団での活動でも様々な効果を得ることができているということだ。幼児期からの経験の積み重ねや音楽との関わり次第で新しい変化をもたらすということである。さらには、好きなジャンルの音楽を通して、全く知らなかった人とつながることもできる。

今回の調査では、それぞれに経験した音楽活動に対する感じ方、考え方、捉え方があり、その経験がその後の成長過程においても何らかの影響を与えているということが明らかとなった。おおむね肯定的な影響となっている。ただ、残念なことに園での活動で、辛い経験もあったようだ。園では定期的に音楽発表会やお遊戯会、運動会での鼓笛等を実施しているところもある。園での音楽表現活動を考えると、盛りだくさんの日課の中で、歌唱活動や楽器練習、発表会や運動会に向けての準備・練習等、相当多くの事をやらなくてはならない。幼児にとっては難しい場面であることも推測される。中にはそれらを「楽しい」と思えない子どももいる。団体での音楽活動の場合は、「しっかりやらなくては」や「間違っではいけない」など、純粋に楽しむこと以外の感情が影響している。学生の回答にもあったように、「必死」や「しっかりやらなければ」という印象だけで活動自体を楽しめていない様子の子どもが複数いるということである。音楽発表会、運動会での鼓笛隊等、保護者向けに発表する場は多

くの園で設けられているし、鍵盤ハーモニカ等の楽器練習や大掛かりな合奏を行うために、音楽の専門講師に指導をお願いしている園もある。保育者にとっても、期日を決められ、指示された内容を指示されたように子どもたちに指導しなければならないわけで、それを負担に感じる保育者もいるのではないか。そういう精神的な負担が、子どもたちにとってもプレッシャーとなり、“叱られて怖かった”や“辛かった”という思い出になっていると考えられる。やり遂げる達成感や楽しい気持ちが生え、育まれたとしても、ずっと正座をさせられて辛かった経験や間違えたら怒られた経験があることで、結果的には辛い思い出として残っていることは非常に残念で、そのような状況はできる限り避けなければならない。全員が肯定的な感じ方を持つのは難しいかもしれないが、学生の回答にあるように、“わくわくした”、“もっとやりたいと思った”と感じてもらえるような活動を展開していくことが保育者には重要だと言える。保育者のかかわり方や計画を工夫することで、もう少しゆとりのある表現活動を行なうことが理想だと考えられる。

幼稚園での責任実習を終えた2年生の調査結果では、実習中の責任実習時に音楽の表現活動として、朝の会、昼食時、帰りの会での歌唱活動が多くあげられた。主活動で音楽的な活動を選択することはやはり少ないようだ。歌唱活動で配慮した点としては、「歌詞を先に伝えるようにした」や「子どもたちの様子を見るようにした」等、授業内やピアノレッスンで学んだ内容を実践している結果が得られた。歌唱活動の場合は、弾き歌いが基本となるが、何度も歌い慣れている曲であれば問題ないが、そうでない場合は、歌詞を先取りして子どもたちに伝えることも大切になってくる。保育の流れが止まらないように、ピアノ伴奏もとまらないようにする必要がある。また、年齢によっては歌う速さにも留意しなくてはならない。そういった歌唱活動時に必要な配慮をしていることがわかり、授業の効果がでている。

実際の保育現場を経験し、音楽活動に挑戦した結果、具体的に活動を援助する側に求められる能力は何かという問いに関して一番多かった回答は、やはり「ピアノの演奏技術」であった。いつまでも「ピアノの演奏技術」だけにとらわれていると、なかなかうまくいかないだろう。しかし、今回の調査からは、まだまだ「ピアノの演奏技術」という点で未熟な部分が多く、園での音楽表現活動＝ピアノへの不安という印象でしか捉えられていないことが明らかとなっている。養成校でどのようにこの技術面の不安をとりのぞいていけるのだろうか。ピアノ以外で行なう事を考えることは可能か。歌唱活動を実施する際、ピアノ以外の楽器での伴奏を考えたとしても、現時点では適当ではない。なぜなら、教材として出版されている子どもの歌や季節の歌を扱った楽譜については、ピアノ伴奏で書かれており、弾き歌いはピアノ伴奏で想定されている。次に、弾きながら子どもたちと一緒に歌うことを考えると管楽器は不可能である。弦楽器も楽器を首に挟むようなタイプのバイオリン等は演奏しながら一緒に歌うことを考えると現実的でない。このように考えると、ピアノで伴奏をするか、もしくは何もせずにアカペラで歌い導くという選択肢になる。学生の中には、「実習で弾き歌いをする時に緊張のあまり頭が真っ白になり、伴奏がとまってしまい立て直せなかったため、やむを得ず、手拍子をしながらかった」というケースもあった。これらをふまえると、現時点ではやはり音楽表現活動を実施する際に保育者が使用するツールとして「ピアノ」は

欠かせないものということになる。実習や就職後に多くの場合、ピアノを利用して保育を進めていくことになるため、ピアノの演奏技術や歌唱能力というのが保育者には欠かせない。

しかしながら、子どもたちと表現活動を行う保育者がいつまでも技術面で不安や難しさを抱えたままでは、主体性や自由度が減ってしまう。例えば、子どもたちが〇〇を歌いたい、〇〇を歌いながら体を動かしたいと思っても、ピアノの技術的な問題が生じていると、応えることができないだろう。保育者自身が不安を抱えて楽しめないでいるにもかかわらず、子どもに楽しいと感じてもらうことはできない。調査結果からも推察できるように、幼児期の表現活動は成長にも影響を与える大変重要な活動であるため、活動を自由に楽しめるような環境を保育者は子どもたちに提供できるようにしなければならない。将来保育者を目指す学生にとっては、音楽、特にピアノの能力について、自信が持てるほど養成校での短い学びで賄うことは厳しい状況がある。

音楽表現活動を通して子どもたちにどのように感じて欲しいかという問いに、「音楽を楽しみたいと感じて欲しい」という回答が一番多かったが、子どもたちに楽しいと感じてもらうためには、保育者自身も楽しんでいなくてはならない。だが、自分自身が教える立場や環境を提供する側になると、純粋に子どもたちと音楽表現活動を楽しみながら行うことができているとは言えない。楽しめないばかりか、調査結果からは、音楽の楽しさを伝えることよりもピアノの演奏技術が未熟であることの不安や難しさ、緊張ばかりを感じていることが明らかになっている。音楽に限らず、子どもにとって表現活動は、子どもたちが見たもの、聞いたもの、触れたものをそれぞれ自由に感じ、自分の感じたものや思いを自由に表現していくことを大切にしていくものである。また、他者の表現したものを感じ、受け入れ、理解し、お互いを認め合うことも大切であるため、保育者は子どもたちの様子をよく観察し、子どもたちが表現したものを読み取る力をつけておかなければならないだろう。

養成校での指導においては、ピアノを弾く際、指番号や原曲ばかりにこだわる指導者が多くいる中で、ピアノの演奏技術を向上させながらも、自分自身が歌うことも楽しみながら弾き歌いができるような学生を育てていかなければならないと改めて感じた。ピアノの演奏技術は重要だが、ピアノが苦手でも柔軟に対応できる方法を身につけなければならない。ピアノだけでなく、歌唱力も必要な要素で、「元気よく歌おうね」や「大きな声で歌いましょう」と声かけをするとほとんどの場合で子どもたちは叫び声やただ単に大声で歌ってしまう。保育者が手本となる歌い方を出来るようにしておくことが必要とされ、声かけについても配慮が必要だということが明らかとなった。

## VI. まとめ

11

今回の調査では、保育者を目指す学生自身の幼児期の音楽表現活動や、音楽との関わり等について学生自身はおおむね好意的な印象を持っているという事が明らかとなった。園生活での音楽表現活動は少なからず、その後の成長に影響を及ぼしているということになる。幼児期の音楽表現活動の重要性が明らかとなった。ただ、子どもたちに今後、音楽表現活動を

提供する側となった時には、ピアノの演奏技術や適切な声かけ、配慮など、自分が楽しむだけでなく、様々なことを考えながら、進めていかななくてはならない。ピアノの演奏技術以外にも様々な技術・能力が必要である。いつまでも、ピアノの技術ばかりにとらわれていては、音楽表現活動を真に楽しむことができない。養成校での短い学びの中でピアノばかりに着目する学びではなく、自分自身も楽しんで行えるような活動を提供できるような能力を身につける必要がある。指導者は、ピアノの演奏技術ばかりにとらわれた指導だけでなく、ピアノ以外に必要な技術、能力が得られるような学びを提供すべきである。

#### 注

- 1 園生活での音楽活動（歌唱や楽器演奏等）や園以外での習い事等で音楽と積極的に関わることのできる時期を対象とした論述のため、今回の研究に関して「乳児期」は除外している。
- 2 CiNii（NII学術情報ナビゲータ）で「保育者 養成校 ピアノ」で検索した場合、検索結果が128件該当し、ピアノに関する研究は相当数存在する。

#### 引用文献

- 1) 山下世史佳他 幼児期の音楽表現活動における歌唱の役割 岡山大学教師教育開発センター紀要第9号 p.122 2019年

#### 参考文献

- 1) 登啓子 保育における音楽表現活動の検討 埼玉学園大学紀要 2012年
- 2) 岩佐明子他 保育現場における幼児の音楽的な表現活動の一考察 京都文教短期大学研究紀要 2016年
- 3) 鈴木みゆき他 乳幼児教育・保育シリーズ 保育内容表現 光生館 2018年
- 4) 三森桂子他 新版実践 保育内容シリーズ5 音楽表現 一藝社 2018年
- 5) 無藤隆他 10の姿プラス5・実践解説書 ひかりのくに 2018年
- 6) 小林洋子 保育者に必要な音楽指導 四條畷学園短期大学紀要 2017年
- 7) 中村礼香 表現活動を通して育まれる資質・能力 鹿児島女子短期大学紀要 2018年
- 8) 豊辻晴香 領域「表現」のねらいや内容が達成される音楽表現活動を学修するための音楽系授業の一考察 純真短期大学紀要 2018年